

パワポの功罪

山本 淳子

かつての同僚の N 先生のフェイスブックに「Real Leaders Don't Do PowerPoint」(本当のリーダーはパワーポイントをやらない) という本が紹介されていた。わかりやすい授業のあり方を日々考える教員にとって視覚に訴えるパワーポイント(以下パワポ)で講義内容を考えるのはごく普通のことだと捉えていたので、なぜ N 先生がその本を愛読書としているのか興味を持った。

要は、パワポを使うことで本当にやる気のある学生にとっての「ライブ感」がなくなるということだ。スライドを見せてそれを説明して・・・というやり方では、前日か、1週間前か、場合によっては1年前に用意したスライドの順番に沿って授業が進んでいき、教員と学生間の「生」のやり取りが疎かになるということである。痛いところを突かれた。まさに私のことだ。

なぜパワポを使うのか。それは「この授業で教えたことはこういうこと」と決めてパワポ中心に授業内容を組み立てる方が、それなしで学生と向き合いその場の流れでどんどん質問させ、それに答えるといった授業形態よりも、圧倒的に簡単であるからである。後者は教える側の専門性の深さと、当意即妙に答えるという技量が求められる。これはライブ感があるものの、やはり私には難しい。

卒業した学生がかつて、こんなことをつぶやいていた。

「授業のスライドと同じ物を印刷して配るのは、ホントやめてほしい」

どうしてと訊ねると、目の前のスライドが手元にあっても何の学びにもならないので意味が無いとのことだった。私はこれを学会発表でよくやる。やはり手軽に配付資料が作れて楽だからだ。

見せるにしても、配布するにしてもパワポは「私の言いたいことはここに書いてあります。以上」という発信者側の一方的な姿勢を示すもので、双方向のやり取りを促進するものではないのかもしれない。

当面パワポ型授業はやめられそうにない。ただ、スライドの枚数を減らしライブ感を取り入れる努力は続けたい。授業から生まれた疑問や発見から議論を深めるという余地を少しずつでも増やして行けたらと思う。

(やまもと じゅんこ 教授/教員養成センター)